

「賄い屋の話」が示す『カンタベリー物語』の終局の様相

Finality of *The Canterbury Tales* in “The Manciple's Tale”

本田 崇洋

福島工業高等専門学校 一般教科

HONDA Takahiro

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2023年9月4日受理)

In *The Canterbury Tales*, the last pilgrim who tells the story on the way to the cathedral is the Parson. The Parson doesn't want to tell the story which doesn't contain "soothfastnesse", though the Host asks him to tell a fable. Then, the Parson expounds the Seven Deadly Sins and the nature of penitence, that is, the Parson's tale is contrary to the "fiction". *O.E.D.* gives one definition of "tale": "a mere story, as opposed to a narrative of fact; a fiction". In this point, the Parson's "tale" can be interpreted as not a "tale" meaning "fiction". The second last tale is "The Manciple's Tale"; it is a fable, mainly based on Ovid's *Metamorphoses*. Applying to the meaning of *O.E.D.*, "The Manciple's tale" can be treated as the "last tale" in *The Canterbury Tales*. The tale has an aspect of tragedy, suggesting the fear of a tyrant, an authority's murder, and fatal careless utterance, as reflecting the negative and degenerate aspect of this world. Moreover, in this fable, the protagonist Phebus, a symbol of "sun", will kill himself in the last scene. The Manciple finishing his tale, the sun is going down and the darkness is coming, as associated with the gloomy implication of his suicide. "The Manciple's tale", as the last tale, also including the preceding fable tales, signifies the sufferings of this world. It can be linked with the part of "comedy" of *Troilus*, where, Troilus, though his experience of the tragic death and the sufferings in this world, finally, can feel the true happiness and the uselessness of worldly pleasure in the celestial world. In other words, this "last tale" can symbolize the sufferings like "end-time" in Christianity.

Key words: "The Manciple's Tale", *The Canterbury Tales*, tyrant, tragedy, comedy

1. はじめに

『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)の最後の話は「教区司祭の話」("The Parson's Tale")である。また、最後から二番目に語られる物語は「賄い屋の話」("The Manciple's Tale")である。「教区司祭の話」は悔悛と七つの大罪に関する説教話であり、この話は、それまで語られる巡礼者たちの物語にある貪欲、高慢、怒り、妬みなどといった大罪に関わる行為、「ジェネラル・プロローグ」("General Prologue")で示唆される巡礼者たちの不正な行いに対応している。すなわち、最後に語られる「教区司祭の話」では、これまでの巡礼者の様子、物語で行われた行為が回顧され、悔悛へ促される。

そもそも、"tale" は *O.E.D.* では、"5. a. I. 5. a A mere story, as opposed to a narrative of fact; a fiction, an idle tale; a falsehood." と説明されている¹⁾。
"tale" を「虚構」として捉えれば、「教区司祭の話」は

「虚構」ではなく、「真実」の語りとなる。実際、宿屋の主人は教区司祭へ仮作の物語を語るよう依頼する。

For every man, save thou, hath toold his tale.
Unbokele, and shewe us what is in thy male;
For, trewely, me thynketh by thy cheere
Thou sholdest knytte up wel a greet mateere.
Telle us a fable anon, for cokkes bones!
(X. 25-9) (underline mine)

しかし、教区司祭は、虚構 ("fable")、真実 ("soothfastnesse") を無視した話はしたくないと返答する。

This persoun answerde, al atones,
Thou getest fable noon ytoold for me;

For paul, that writeth unto Thymothee,
Repreveth hem that weyven soothfastnesse,
And tellen fables and swich wrecchednesse.
(X. 30-4) (underline mine)

教区司祭は虚構の語りを拒否し、「真実」に基づく話をしたいのである。つまり、“tale”を「虚構」の意味で捉えた場合、『カンタベリー物語』の最後の“tale”は、「賄い屋の話」となる。本論では、「賄い屋の話」を巡礼最後の「虚構」として捉え、そこで示される『カンタベリー物語』の終局の様相について論じる。

2. 「賄い屋の話」のプロローグの特徴について

「賄い屋の話」のプロローグは以下のような内容である。昨晚の酔いがまだ抜けない料理人は、眠気に逆らえず、馬に乗りながらうたた寝をしている。今にも落馬しそうな有様である。呆れ果てた宿屋の主人は、料理人を罵倒しながら、代わりに賄い屋に話をするよう要求する。賄い屋は、見苦しく酔っ払っている料理人を激しく罵る。その言葉を聞いた料理人は烈火の如く怒り、激しく首を振って落馬する。

宿屋の主人は、怒った料理人は、狡猾なやり方で賄い屋を陥れるであろうと忠告した。その忠告に賄い屋は警戒する。この料理人は容易に相手を罠にかけることができる²⁾。料理人の狡猾な仕返しとは、帳簿の粗探しをして、賄い屋の世間的な信用は失わせることである。賄い屋は、「ジェネラル・プロローグ」で商才に長け、金銭の扱いに抜け目のない人として紹介されている³⁾。他の巡礼者たちのほとんど、豪華な衣服に身を包み、贅沢な料理を食していることは、「ジェネラル・プロローグ」から明らかである。この巡礼者たちは、どういう手段で成功しているかは怪しいところではあるが、社会的に成功した賄い屋を含む巡礼者たちにとって、世間での評判や信用を落とされることは、自身に大きな損害を与えることになる。商人が信用を失えば、商売に悪影響を与え、果ては困窮することになる。商人にとって信用を失うことは、ほとんど死と同義であることは明白である。賄い屋は、料理人が乗っている雌馬に金を出したほうが、喧嘩をするより得策であると判断し、酔っ払いの料理人にワインを差し出すこととする。賄い屋は打算して判断したわけである。多少の損はやむ無しとしながら、どちらの方が損害は少なくて済むか、機転を利かせることで、その危機から逃れているのである。

料理人はそのワインを一気に飲み干すと、怒りを忘れ

上機嫌になる。いわば、ワインが、料理人の憎しみを解消し、和解させたことになる。それに対して宿屋の主人は、ワインは憎しみと悲運を調和と愛に変化させ、多くの過ちを救う、バックスは、真面目を冗談に変えることのできる神様である、と言う⁴⁾。酔いどれが、さらに酒によって、憎しみと苦難を解消するという皮肉的な結末であるが、ここには注目すべき点が二つある。

一つ目はワインである。巡礼者の話では、ワインに対する言及を度々見ることができる。「弁護士の話」(“The Man of Law’s Tale”)、「免罪符売りの話」(“The Pardoner’s Tale”)、「修道士の話」(“The Monk’s Tale”)などといった人殺しが見られる物語では、ワインを含む酒は、殺人、裏切りの誘因であることが多い⁵⁾。酒によって人間は常軌を逸し、人を裏切り、殺人を犯す。しかし、この料理人と賄い屋のやり取りでは、ワインを通して、危機を喜劇へ変換させたものとして描かれたことは注意すべき点である。つまり、破滅と悲劇の様相を含意する「ワイン」が、このような喜劇へ変転するものとして表現されたことは、巡礼の終局になって初めてである。

もう一点は、喧嘩から仲直りのプロセスが描かれたことである。これまでの道中の巡礼者のやり取りを見ると、話の内容で互いに喧嘩をする。例えば、粉屋と大工、托鉢修道士と教会裁判所召喚史は、相手の職業を愚弄する話をして喧嘩になる、また宿屋の主人は免罪符売りの不道德な仕事ぶりに暴言を吐く。喧嘩した巡礼者たちは、その不仲は解消されないまま終わる⁶⁾。賄い屋のプロローグでは、争いの火種を回避して、仲直りをする初めてのプロローグであり、実質的に最後の物語であることを考えると、全ての物語が語られた後で、唯一の仲直りが達成されていたことになる。

巡礼者の“tale”には、「虚構」という側面の他に、「過去の出来事」という特徴を見ることができる。これはプロローグにはない特徴である。物語は巡礼者が話す時点で、話の結末は決定している。いわば、物語は逃れられない定め、つまり「運命」的側面、歴史的な様相を持っていると言える。一方で、物語のプロローグは、過去の世界ではなく、巡礼者から見れば、彼らの時間は「現在」にある。「現在」に焦点が当てられているならば、巡礼者の視点からは、その出来事は不確定であり、不明確な様相である。運命的な縛りのないプロローグは、巡礼者は定め範疇外にあり、そこは自由意志が適う状態であると言える。チャーサーは、『カンタベリー物語』に「現在」のプロローグと「過去」の物語を対比させていることに

なるが、チョーサーのこれまでの作品は、無論、「過去」を示す物語である。『カンタベリー物語』に、「現在」を明確にさせたプロローグを導入したことは、自由意志を反映させるために、また、悲劇とその回避を人間の行為に委ねるために、一つの意義があると言えよう。怒り狂う酔いどれの巡礼者にワインを与えるという機転で、怒りと恨みに呪われる結末を回避した。宿屋の主人は「調和と愛」と表現しているが、これは、言葉を換えれば、災いの回避である。重要な点は、『カンタベリー物語』の最終局面では、今を生きる現実世界を舞台に、運命から逃れることができたということである。

3. 「賄い屋の話」で見られるチョーサーの独自性

「賄い屋の話」に関して、指摘されている種本は幾つか存在するが、主にオウィディウスの『変身物語』にその大筋を見ることができる⁷⁾。「賄い屋の話」は、フォイボスが地球に住んでいた時の話である。フォイボスはカラスを飼っていた。そのカラスは白いカラスである。フォイボスには妻がいた。フォイボスは妻に対して嫉妬深く、常に妻を監視している。フォイボスが家を空けたとき、妻は情夫を家に迎え入れる。飼われている白いカラスはその二人の情事を目撃していた。フォイボスが帰ってくると、白いカラスは奇妙な鳴き方をして、フォイボスの注意を引く。白いカラスは、妻の密通の現場を見たフォイボスに伝えた。その事実にはフォイボスは怒り狂い、妻を弓で殺してしまう。すぐにフォイボスは自分の行為に後悔する。妻を殺した後悔と悲しみから、フォイボスは自殺を決意する。同時に、妻の密通を告げたカラスに怒りの矛先が向き、「嘘の作り話（“false tale” (IX. 293)) をしたもの」として、白いカラスに罰を下す。フォイボスは、白い羽を無くし、末代までカラスの色を黒くし、二度と話せないようにして、窓から放り投げた。

『変身物語』とは異なり、チョーサーの物語は単純化されている。物語自体も他の巡礼者の物語に比べ短い。例えば、これまでチョーサー作品で見られたように、登場人物の心情が巧みに描かれたりすることはない。話が劇的に流れ、聴衆の心を揺さぶらせるようには意図されていない。そもそも話の内容が賄い屋と関係性が無いことや、修辭学的に余分な言葉を入れすぎている物語であると指摘されている⁸⁾。しかしながら、話の隙間にある、内容に伴う例え話や意見、助言が多く語られていること、言い換えれば、この挿入されたチョーサーの言葉こそ、「賄い屋の話」の本質的な側面と捉えるべきである。こ

のチョーサーの言葉は、詩人が生きた社会に対する卓識であり、言葉を変えれば、チョーサーの社会に対する卓識こそ、この物語の詩人の独自性として捉えることができる。

この物語とプロローグの関連について、物語はプロローグとは真逆の様相を呈している。例えば、フォイボスはピーソン（“phitoun”）を殺すほどの弓の名手である。「気高く価値のある行為はすべて弓を使って行った」(IX. 111-2)とあるように、フォイボスにとって、弓は自身の名誉を示す一つのステータスである。フォイボスは、その名誉ある弓を使って妻を殺したわけである。一方、プロローグでは、怒り狂った酔いどれとの和解の道具はワインであった。『カンタベリー物語』で描かれるワインは、悲劇の起因として語られてきたものであった。悲劇の要因のワインは和解をもたらす一方で、気高い「弓」は、最愛の妻を殺し悲劇をもたらす。物の使い次第で、本来含意している特徴とは結びつかない、または、全く別の結果をもたらしていることになる。それぞれの主要な道具が、プロローグでは喜劇へと終着し、物語では悲劇の結果をもたらしている。

種本の一つである『変身物語』との類似点は以下の通りである。妻が他の男と情事を行う点、カラスがそれをフォイボスに密告すること、フォイボスが弓で妻を殺す点、殺した後フォイボスは激しく後悔し、怒りの矛先は密告したカラスへ向かうこと。カラスの忠義立てが仇となり、喋りすぎが身の危険を引き起こす点である。

相違点は以下の通りである。チョーサーのカラスはフォイボスが帰宅したときに、妻の不貞の事実を教える。オウィディウスのカラスは褒章を目的としているが、チョーサーのカラスにはそれがなく、真実を語ることを美德と捉え、自発的に行ったような描き方である。

他の相違点として、フォイボスの妻と間男の描写にも違いを見ることができる。オウィディウスの物語では、フォイボスの妻には名前があり、彼女の発言も描かれる。オウィディウスの妻は子を身籠もっている。『変身物語』の妻の姿は、チョーサーのフォイボスの妻よりも具体的に描かれている。一方で、チョーサーの物語の妻には名前がなく、彼女には一つの台詞も与えられない。チョーサーの妻は、具体的な性格の特徴がまるで無く、不貞を犯した女性として描かれているだけである。結果として、ただの不貞の妻という「記号」のような印象が与えられているだけである。この点は、物語の「単純化」を助長しており、チョーサーの意図的な演出として捉えるべきであろう。

4. 「暴君」の主題

物語の単純化された枠組みの中で、自身の所見を述べるがこの物語における本意だとすれば、チャーサーは何を伝えたいのか。「賄い屋の話」には主従関係や権力が強調されている点に注目したい。「賄い屋の話」のチャーサーの独自性として、カラスとフォイボスの関係が重要である。カラスはフォイボスの歌の弟子であり、いわば師弟関係にある。加えて、オウィディウスのカラスは、籠の中で飼われてはいない。一方で、チャーサーのカラスは籠の中で飼われている。籠の中の飼育は、いわば、従属や服従を意味するであろう。師弟関係のみならず、これはフォイボスとカラスの主従関係をより明確に示していると考えられる。

オウィディウスの物語では妻の浮気相手は何も言及されないが、チャーサーの間男に関しては、フォイボスと比較されながら、その間男は徹底的に価値の低い人間であることが強調されている。チャーサーの間男には、地位の低さが強調されているわけであるが、別の見方をすれば、これはフォイボスの地位の高さが強調されていることにある。チャーサーは続けて「そこから大きな災難や悲劇が生じる」(“Of which ther cometh muchel harm and wo.” (IX. 202)) と述べている。フォイボスのような権力者には、“harm”や“wo”をもたらす力がある権力者、つまり、暴君の印象が与えられている。

暴君を示唆する箇所を幾つか見ることができる。フォイボスの妻とその間男に関して、彼らの人間的な低劣さが言及されている。“the word moot nede accorde with the dede” (IX. 208) と語られ、つまり、行為と言葉が一致していなければ、高い身分や地位であっても本質的に下劣なものと変わらない、ということである。例えば、身分の高い女性が、他の男性の「愛人」であれば、それは“wenche” (IX. 220) や“lemman” (IX. 220) と呼ばれる。身分の違いがあっても、不貞を働けば性質は同じであり、これに差はない。この例えに、「暴君」(“titlees tiraunt” (IX. 223)) の例が挙げられる。暴君は、“outlawe” (IX. 224) と“theef” (IX. 224) に違いはない。むしろ、盗賊や無法者のほうが、国全体を揺るがす力を持たないだけましであると言う。暴君が“capitayn” (IX. 230) と呼ばれているが、軍隊で家を焼き払い破壊し、国に害をもたらすものは、“tiraunt” であると言う。その他にも、「賄い屋の話」で挿入される例えを挙げるときには、“unavysed smyteth gilteles” (IX. 280)、“to muche speche/Hath many a man been spilt” (IX. 325-6)、“a

swerd forkutteth and forkerveth an arm a-two” (IX. 340-1) というように、権力者と暴力を結びつけたような表現をたびたび見ることができる。

『カンタベリー物語』では、暴力的な権力者は、チャーサーの関心の一つであると言える。例えば、「弁護士の話」(“The Man of Law’s Tale”)の王の母ドネギルド、「医者の話」(“The Physician’s Tale”)の判事アッピウス、「修道士の話」(“The Monk’s Tale”)のネブカドネザル、ペルシャザル、ネロといった高慢な王たち、「第二修道女の話」(“The Second Nun’s Tale”)の都長官アルマキウスといった権力者による殺人、「大地主の話」(“The Franklin’s Tale”)で挿入された例え話では、フィドンを殺した三十人の暴君 (V. 1368)、メッセナヤの暴君 (V. 1379)、というように他の作品でも多く見ることができる。*Lak of the Stedfastnesse* や *The Former Age* といったボエティウス風小詩でも、チャーサーの作品には珍しく、リチャード二世の失政に対する嘆きをより直接的に感じることができる⁹⁾。

そもそも、チャーサーは『カンタベリー物語』で様々な巡礼者に語らせる物語を選別する場合、また、物語中で挿入する例え話に関しても、無慈悲な権力者を語る必要はなかったはずである。宮廷で生き、否が応でも高慢、横暴な権力を目の当たりにしてきたチャーサーにとって、余計なことを言えば、自身に危険が及びかねない。その主題を避けることもできたはずであるが、あえて選んでいることは留意すべき点である。「虚構」という作られた世界は、現実とは異なる世界という表向きに理由をこしらえることができる。チャーサーが「虚構」を強調する一つの理由はここにあるかもしれない。チャーサーは、虚構の世界で、現実世界の事実を反映させているのである。一見すると無関係のように見えながらも、チャーサーの意趣は、虚構で示される主題と密かに絡み合い、そこで、現実世界で目の当たりにした経験と恐怖、疑念が、滲み出ている。チャーサーは、虚構という建前の空間の中で、ひっそり本音を忍ばせているのである。

『カンタベリー物語』の中で動機と原因が同じでも、権力者が関わると悲劇となる。例えば、「賄い屋の話」で以下のような忠告がされる。

Ne telleth nevere no man in youre lyf
How that another man hath dight his wyf;
He wol yow haten mortally, certeyn.
(IX. 311-3)

「妻が他の男と関係をもったことは、絶対に誰にも話していけない、それを聞いた夫は必ず激しくお前を憎む」と述べられている。『カンタベリー物語』の前半にある「粉屋の話」(“The Miller’s Tale”)や「荘園管理人の話」(“The Reeve’s Tale”)では、愚鈍な旦那を騙しながら、妻を寝とるというファブリオーである。「妻が寝取られる」というモチーフは同じであるにも関わらず、滑稽話は文字通り笑いに転化されるが、「賄い屋の話」においては、妻を殺し、鳥を呪い、自殺に至る惨事となる。その悲劇を生み出した原因の一つは夫が権力者であったためである。

「賄い屋の話」で語られる「軽率な言葉を慎む」という金言は一般的なものではない。どちらかと言えば、その世界に影響のある人物、権威者に対するものと捉えるのが妥当である。商人の世界と宮廷の世界を知るチョーサーにとって、その現実とは、正しいか正しくないかという二極化することはできない曖昧な世界であり、本音と建前、裏と表の二重の世界で成り立っていることは、充分すぎるほど身に染みているはずである。事実が必ず真実であるという考えは、宮廷や商人の世界で生きる者にとって、力と影響を持つ者を理解しておらず、それはあまりにも単純である。『カンタベリー物語』には権力者の暴力、専横ぶりといった主題が底通しているが、慎重な言葉も必要であるというのは、特に、権力者、暴君の前での処世法であると考えられる。

「賄い屋の話」のプロローグの争いでは、和解のために打算的な駆け引きがあった。物語でのフォイボスの怒りは、何も考慮することなく、真実を表に出しただけの、単純な行為であった。平和をもたらしたプロローグの方がより狡猾である一方で、悲劇をもたらした物語は単純である。言い換えれば、チョーサーの生きる世界では、プロローグで示される「狡猾さ」が重要であり、一方で「賄い屋の話」ではその狡猾さが欠如していたのである。「現在」を象徴するプロローグは、商売の世界での悲劇からの回避するための機転が示され、逃れられない運命の象徴する「賄い屋の話」は宮廷における悲劇であった。

5. 「賄い屋の話」で示される『カンタベリー物語』の終局的側面

『カンタベリー物語』の終盤で語られた悲劇の根源は、「軽率な言葉」であった。その「賄い屋の話」の最後に締め括られる助言は、口頭で語られる巡礼者の物語、それ自体の「反省」と捉えることができる。「賄い屋の話」では、軽忽な言葉に対する助言が以下に行われる。

He may by no wey clepe his word agayn.
Thyng that is seyde is seyde, and forth it gooth,
Though hym repente, or be hym nevere so looth.
He is his thral to whom that he hath sayd
A tale of which he is now yvele apayd.
(IX. 354-8)

「話した言葉はずっと言われ続ける」、また「どうしても自分が喋ったことは呼び戻すことはできない」と述べられている。話された言葉は、一過性のものであるが、それが人間を介した場合、際限なく伝播し続ける。一度口から出たものは取り消すことはできない。言葉には、身を滅ぼす危険性と言葉には責任の重みがあるということである。「賄い屋の話」の軽率な言葉の忠告は、口頭で語る行為そのものの否定とも捉えることができる。しかしながら、退屈凌ぎに道中で物語を語る『カンタベリー物語』の巡礼者たちは、卑猥、乱暴、粗野、軽率な言葉で語ってしまう。言葉の不安定な要素は、『カンタベリー物語』の主要な動機に対する否定的側面と解釈することができる。今まで行われてきたことに対する回顧と反省がここで示されている。さらに重要な点は、これが『カンタベリー物語』の終盤に提示されたことである。

「賄い屋の話」のプロローグの冒頭で、宿屋の主人は突如、「事態は行き詰まりだ」(“what! dun is in the myre!” (IX. 5))と言う。これは、酔っ払って居眠りしながら、遅れてやって来る料理人に対する言葉である。本来は料理人が物語を語ることになっていたが、宿屋の主人は、料理人の話など干し草の価値ほどもないと述べている (IX. 14)。注意すべきことは、『カンタベリー物語』の終局において、巡礼者の中には、物語を聞かない、話そうとしないという、この道中の慰めという一つの動機を拒否している点である。これは、『カンタベリー物語』の主要な動機が失われていることを示唆している。先に例を挙げた宿屋の主人の言葉“myre”に注意したい。“mire”は「泥沼」であり、抜け出せない状態、つまり、苦境、困難を表す。興味深いことに、“mire”は、「賄い屋の話」でも、フォイボスが妻を殺した後悔の言葉に使用されている (“a thousand of folk hath rakel ire /Fully fordoon, and hem in the mire.” (IX. 289-90))。 “mire”を通して、プロローグの始まりで示された鈍化した状況は、物語の終幕に再び表現され、引き継がれている。

「賄い屋の話」が巡礼者の動機の低下を示唆する点で、

主人公の名前が“Phebus”であることに注意したい。フォイボスの別名は、“Phoebus Apollo”である。つまり、太陽神である。チョーサーは太陽について言及する時に、“Phebus”の名称を使用するとジョン・ノースは指摘している¹⁰⁾。暴君を示唆する「太陽」は、妻を殺し、真実を語ったものに罰を与えた。自身の軽率な行為を後悔し自殺しようとする。言い換えれば、「太陽」それ自体が没落する過程を辿っていると言える。それに伴うように、賄い屋の話が語られる時間帯、敷衍して言えば、物語りの動機が消失しかけている時間帯は、朝であったことに注意したい。つまり、太陽に暗い影が与えられていることが分かる。

「賄い屋の話」が終わった後、巡礼者の最後の話である「教区司祭の話」が始まる。その冒頭では「賄い屋の話が全て終わるときには、太陽は沈んでいた」(“By that the maunciple hadde his tale al ended / The sonne fro the south lyne was descended” (X.1-2)と語られている。注意すべきは、「太陽が沈んでいる」という点であり、“The sonne ... was descended”と表現されている点である。“decend”は、チョーサーによって他の作品でもたびたび使用されている。例えば、『ボエース』(Boece)では“deteriorate”という意味で使用している¹¹⁾。この箇所は、賄い屋の話は朝に語られていたにも関わらず、終わる頃には夕方であったというのは不自然であると指摘がされている¹²⁾。しかし、「賄い屋の話」では、主人公「太陽」が自殺を示唆して幕が閉じていたことに注意したい。太陽が沈んだというのは、物理的な時間の経過の不自然さよりも、主人公の死を象徴的に捉えることができる。そもそもチョーサーは、『カンタベリー物語』における道中の時間的な矛盾は気にしていないと指摘がなされている¹³⁾。太陽が沈むことで、その場は光を失った場所となる。巡礼の最中で物語を語るときに、太陽が沈みかける時間はこの時だけである。光のない場所は、単なる「夜」ではない。「太陽」が、暴君を彷彿とさせる権力者であり、彼が軽率に力を振るい、悲劇をもたらし、その行き着くところは自殺であった。そのニュアンスを含む「太陽の没落」である。言い換えれば、現実世界の退廃的な側面が強調された闇である。

6. おわりに

教区司祭の説教は七つの大罪と改悛についてであり、いわば、これまでのすべての物語と巡礼者の振る舞いに対応する説教となる。教区司祭は、自身の話をする前に、以下のように述べている。

And jhesu, for his grace, wit me sende
To shewe yow the wey, in this viage,
Of thilke parfit glorious pilgrimage
That highte jerusalem celestial.

(X.48-51)

教区司祭が語る「真実」の話は、“parfit glorious pilgrimage / That highte jerusalem celestial”というように、光の巡礼を象徴するものである。これまで語られた巡礼者の“tale”は、あくまで虚構であり、「賄い屋の話」は、最後の虚構の物語となった。同時に、これまでの虚構、特に権力者による殺人と呪いという陰鬱な雰囲気醸し出した「賄い屋の話」と真実の説教である「教区司祭の話」の関係を見ると、「賄い屋の話」は、真実の光の前に訪れる闇、真の幸福の前の絶望であることがわかる。

この闇から光へのプロセスは、言い換えれば、不幸から幸福への精神的変転である。中世時代には、“comedy”は「不幸から始まり幸福で終わる物語」を意味する。ダンテの『神曲』が*La Divina Commedia*と表記されるのは、この物語が、絶望の地獄から始まり、至福の天国で物語が終わるからである。不幸から幸福へ向かうプロセスを持つ、ボエティウスの『哲学の慰め』や、ダンテの『神曲』の主人公の精神的な構造もまた、幸福の心境へ至る前には、今の苦痛と絶望を認識し、見つめ直すことから始め、最終的には、真に理解し受け入れている¹⁴⁾。『カンタベリー物語』でも、「賄い屋の話」が終わると同時に、巡礼者は、今そこにもたらされている闇の現状を理解、認識して、真実の話という光を見つめている巡礼者の姿を見ることができよう。

中期の傑作とされるチョーサーの『トロイルス』(*Troilus*)ではトロイルスは愛する者に裏切られ、苦痛の中で息絶えていく。苦難の後に、トロイルスは現世を離れ、天上の世界から地上を眺め、絶望から解放される。トロイルスの“comedy”はダンテやボエティウスに近い“celestial”である。この“comedy”には真実の幸福を感じるために、この世の苦痛がなくてはならない。『カンタベリー物語』では、舞台をより現実に近い人間世界を中心にしたが、『トロイルス』の“comedy”とは本質的に同じである。『カンタベリー物語』の“comedy”は『トロイルス』と同じ構造をもっていると言えるよう。ただし、「賄い屋の話」では、現実世界で行われた、ワインによる遺恨から和合への変化が示した心的変転は、「虚構」の

中で行われた荘厳な“comedy”ではなく、幾分、人間的視点に基づいた、皮肉混じりの“comedy”であると言える。しかし、『トロイルス』と同様に、最後の虚構である「賄い屋の話」で示された暴君がもたらす苦痛と人間がもたらす「闇」は、真実と至福へ導かれる前の苦難の時間と言えるのではないか。

注 釈

- 1) 本稿による *O. E. D.* は第二版による。
- 2) So myghte he lightly brynge me in the snare.
(IX. 77)
- 3) Of maistres hadde he mo than thries ten,
That weren of lawe expert and curious,
Of which ther were a duszeyne in that hous
Worthy to been stywardes of rente and lond
Of any lord that is in engelond,
To make hym lyve by his propre good
In honour dettelees (but if he were wood),
Or lyve as scarsly as hym list desire;
And able for to helpen al a shire
In any caas that myghte falle or happe.
And yet this Manciple sette hir aller cappe.
(I. 576-86)
- 4) For that wol turne rancour and disease
T' acord and love, and many a wrong apese.
O thou bacus, yblessed be thy name,
That so kanst turnen earnest into game!
(IX. 97-100)
- 5) “The Man of Law’s Tale” (II. 742-9)、“The Physician’s Tale” (VI. 59-60)、“The Pardoner’s Tale” (VI. 880-8)、“The Monk’s Tale” (VII. 2199-201, 2226-8, 2491-2)。ただし、巡礼が始まる前には“Strong was the wyn, and wel to drynke us leste.” (I. 750)と皆でワインを楽しく飲んだとある。現実世界ではその限りではないことが窺える。
- 6) 宿屋の主人に暴言を浴びせられ、腹を立てた免罪符売りは、最後は、“Anon they kiste, and ryden forth hir weye.” (VI. 968)とある。しかし、*The Riverside Chaucer* の注釈にあるように、実際二人仲直りしたかどうかは疑わしい。(The *Riverside Chaucer*, 910) 免罪符売りの遺恨が解消された様子はまるで描かれていない。
- 7) Robert M. Correale, ed. *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*. Vol. II (Woodbridge: D. S.

Brewer, 2005.) 749-50.

- 8) Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. (Oxford: Oxford University Press, 2008) 952
- 9) *Lak of Stedfastnesse* におけるリチャード二世の考察は、本田崇洋「チョーサーの「不安定さ」と「権威」の関連について - “The Man of Law’s Tale” と *Lak of Stedfastnesse* を中心に 福島工業高等専門学校 研究紀要 第 61 号, 2021) を参照。
- 10) Douglas Gray, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. (Oxford: Oxford University Press, 2003.) 23.
- 11) that al kynde of mortel thyng ne descendeth
into wrecchindnesse by the ende of the deth.
(*Boece* II pr. 4 175)
- 12) *The Riverside Chaucer*, 954-5.
- 13) *The Riverside Chaucer*, 955.
- 14) チョーサーの“comedy”についての詳しい考察は「チョーサーのコメディのもう一つの側面について」(シルフェ 第 50 号 シルフェ英語英文学会, 2011) を参照。

参 考 文 献

- 1) Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. Oxford University Press, 2008.
- 2) Correale, Robert M. ed. *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*. Vol. 1-2. D. S. Brewer, 2003.
- 3) Crow, M. M. and Olson, C. C., eds. *Life-Records*. Oxford University Press, 1966.
- 4) Fulk, R. D. “Reinterpreting the ‘Manciple’s Tale’.” *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 78, No. 4, 1979, pp. 485-93.
- 5) Fumo, Jamie C. “Thinking upon the Crow: The ‘Manciple’s Tale’ and Ovidian Mythography.” *The Chaucer Review*, Vol. 38, No. 4, 2004, pp. 355-75.
- 6) Gray, Douglas, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford University Press, 2003.
- 7) Harwood, Britton J. “Language and the Real: Chaucer’s Manciple.” *The Chaucer Review*, Vol. 6, No. 4, 1972 pp. 268-79.
- 8) Herman, Peter C. “Treason in the ‘Manciple’s Tale’.” *The Chaucer Review*, Vol. 25, No. 4, 1991, pp. 318-28.
- 9) Jefferson, Bernard. *Chaucer and the Consolation of Philosophy of Boethius*. Gordian Press, 1968.

- 10) Kelly, Henry Ansgar. *Tragedy and Comedy from Dante to Pseudo-Dante*. University of California Press, 1989.
- 11) _____. *Ideas and Forms of Tragedy from Aristotle to the Middle Ages*. Cambridge University Press, 1993.
- 12) _____. *Chaucerian Tragedy*. D. S. Brewer, 1997.
- 13) Marenbon, John. *Boethius*. Oxford University Press, 2003.
- 14) Minnis, A. J. *Chaucer's Boece and the Medieval Tradition of Boethius*. D. S. Brewer, 1993.
- 15) Ovid. *Metamorphoses*. trans., Rolfe Humphries. Indiana University Press, 2018.
- 16) Patch, Howard Rollin. *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*. Octagon Books, 1967.
- 17) Raybin, David. "The Death of a Silent Woman: Voice and Power in Chaucer's Manciple's Tale." *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 95, No. 1, 1996, pp. 19–37.